

# 月夜の東大寺裏道

熊谷九寿

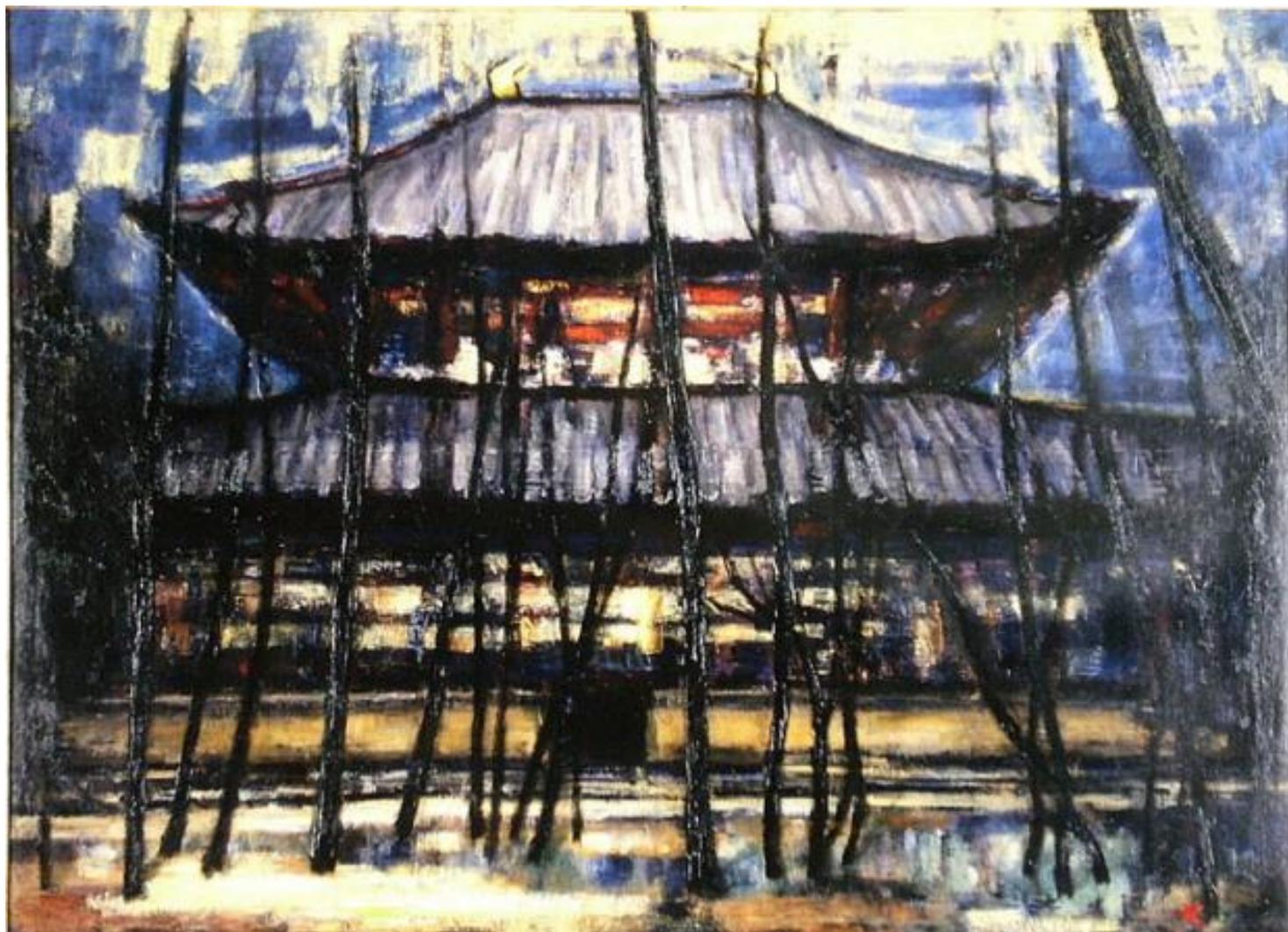
制作年：1954(昭和29)年

サイズ：140.0×193.0cm

材質：油彩、カンヴァス

所蔵：中津市木村記念美術館

1993(平成5)年中津市に寄贈される。



中津市所蔵の作品中最大のものです。熊谷は東大寺との繋がりが深く、昭和46(1971)年からは東大寺の上司海雲を中心として集った画家仲間「七人展」を開催しました。また昭和55(1980)年に東大寺昭和修理落慶の際、六十華嚴経の見返し絵「飛翔」を描きました。

この絵が制作された頃、熊谷は一人深夜の大仏殿の裏道を歩き、悠久の歴史に想いをめぐらせ、感慨にふけていたといえます。

大仏殿と思われる建物が樹間に浮かび上がっています。ここで熊谷が描きたかったものは、東大寺そのものではなく、「月夜」であったと思われます。黒々とした木々とは対照的に、地表や建物は月の光を受けて輝いています。空は月の存在を予感させ、幻想的な世界を作り出しています。光のもたらす微妙な世界の変化をどのように表すか、という新たな可能性に熊谷は挑戦しているようです。形を持たない水と同じく、光という絶えず変化をもたらすものをいかに油絵で表現するか、という問いは、熊谷の制作の本質に関わるものであったと言えます。この作品は昭和29(1954)年の第28回国画会に出品された後、翌年の第6回選抜秀作美術展にも出品され、熊谷の中でも重要な位置を占めた作品であったと思われます。